

ジョン・レイの『天地創造の御業に 明示された神の英知』

門 井 昭 夫

On John Ray's *The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation*

KADOI Akio

抄 録

イギリス博物学の父と言われるジョン・レイ（1627–1705）は植物学と動物学の研究において多大な業績を残した。17世紀の科学革命の後、18世紀初めの哲学者と神学者にとって、科学が知的生活を支配するようになった時代にあって、理性と信仰とを調和させることは大きな問題であった。そうした目的にかなう自然神学はキリスト教会にも知性のある人々にも受入れやすく、17、18世紀を経て19世紀半ばに到るまで全盛の時代を迎える。

レイの自然神学の書『天地創造の御業に明示された神の英知』（1691）は18世紀の間、科学と神学の権威ある書物として広く読まれて版を重ね、非常に大きな影響を及ぼした。

本稿ではレイのケンブリッジにおける活動を略述し、『神の英知』を著わしたレイの態度をまず見る。その後に『神の英知』の具体的内容を概観しながら、引用される聖書との関係、レイの自然観、神の英知と摂理に対する考え、キリスト教徒のあるべき道についてレイはどう考えていたかについて考察したい。

キーワード：ジョン・レイ

博物学

自然神学

神

はじめに

イギリス博物学の父と称されるジョン・レイ (John Ray, 1627–1705) は分類の基本単位としての「種」を「交配可能な一群の生物」と規定し、リンネ以前の分類法の基礎を築いた。植物学の研究では主著『総合植物誌』3巻 (*Historia generalis plantarum*, 1686–1704) ほか、『植物の新分類』 (*Methodus plantarum nova*, 1682) などを著わした。『総合植物誌』では当時までに知られた18,600種の植物を記載し、125の類にまとめ、自然分類系への試みを初めて行っている。

動物学の面では、共同研究者であったフランシス・ウィラビー Francis Willughby, 16xx – 17xx) の死後、レイが本にまとめてウィラビーの名前で出版した『鳥学』 (*Ornithology*, 1678) があるが、レイの著作は魚類、四足動物など広い分野にわたっている。この『鳥学』は『セルボーン博物誌』 (*The Natural History of Selborne*, 1778) で知られるギルバート・ホワイト (Gilbert White, 1720–93) の主たる参考文献の一つであったけれども、内容的には十分なものではなかった。

17世紀は科学革命の世紀と言われ、ニュートンが万有引力の法則を発見し、宇宙の原理を数学的に説明した。その結果、理性が驚くべき勝利を収め、それより前の時代の神学 (スコラ哲学) が知性のある人々によって文句なしに受け入れられるということは不可能になった。18世紀初めの哲学者と神学者にとっての大きな問題は、科学が知的生活を支配し始めて以来そうであったが、理性と信仰とを調和させることであった。とりわけ、苦境にあったキリスト教会側は、キリスト教の教義と科学とを調和させることの必要性を痛感した。自然神学はそうした目的にかない、教会にも知性のある人々にも受け入れやすく、17、18世紀を経て19世紀半ばに到るまで自然神学全盛の時代となる¹⁾。

レイの自然神学の書『天地創造の御業に明示された神の英知』 (*The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation*, 1691年印刷; 以下『神の英知』 (*The Wisdom of God*) と略す) は18世紀には、科学と神学の権威ある書物として広く読まれ、版を重ねて非常に大きな影響を及ぼした。その内容の多くがペイリー (William Paley) の『自然神学』 (*Natural Theology*) に取入れられて、『神の英知』はさらに寿命が延び、その影響は後の時代にも及んだ。

本稿では『神の英知』の内容をつぶさに見てゆく。そしてこの自然神学の書の持つ意味を科学者、博物学者、また広く一般の人々に及ぼした影響その他の点から考察することにする。初めにレイの生い立ち、博物学の研究、その他について簡単に記しておく。

1. レイの生い立ちとケンブリッジでの勉学

レイはエセックスのブレイントリー (Braintree) 近くのブラック・ノットリー (Black Notley) という村の鍛冶屋ロジャー・レイ (Roger Ray) の息子として、1627年に生まれた。兄一人、姉一人で、母のエリザベス (Elizabeth) は民間薬と薬草を用いて軽い病気の治療を行う専門家で社会的に重きをなし、尊敬されていた。

レイは学校では抜群の秀才として目立ち、ブレイントリーの教区代理牧師のサミュエル・コリンズ (Samuel Collins) によって学問の才能を認められ、その世話で1644年に15歳でケンブリッジのキャサリン・ホールに入学を許され、給費生となった。これは村の鍛冶屋の息子としては非常に大きな一歩であった。

レイはキャサリン・ホールで充実した内容の教育を受け始め、すぐに優秀な学生との評判を得た。しかし、このコレッジの教育は時代後れのものであり、古い時代の自由学芸を思わせるものであった。1646年、レイの最初のチューターが死去し、援助者サミュエル・コリンズの影響力のせいで、レイはトリニティー・コレッジに移った。

トリニティーではアリストテレスを完璧と見做すよりも、実験と観察によって世界を研究しようという新しい考えに馴染んでいた。レイは同年輩のアイザック・バロウ (Isaac Barrow) と切磋琢磨し、古典語 (ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語) と数学に熟達したが、カリキュラムには現在、科学と呼ばれているものは何もなく。バロウは1663年にケンブリッジの数学の初代ルカ教授に指名され、ニュートンを教え、後にトリニティー・コレッジの学寮長になった人である。

レイは1648年にトリニティーを卒業し、1649年には22歳でトリニティーのジュニア・フェロウに選ばれ、後にシニア・フェロウとなった。1651年にはギリシア語の講師、1655年にはギリシア・ラテン語・文学の講師となり、翌年には再びギリシア語の講師に指名された。

しかし、1660年の王政復古後、レイは礼拝統一法 (Act of Uniformity) に署名同意することを拒んだために、1662年にフェロウの地位を失った。この礼拝統一法は英国国教会の基準となる習慣として、英国国教会祈禱書による儀礼と儀式を課し、すべての聖職者に主教による聖職叙任を要求するものであった。国王チャールズ二世は、聖職者および大学の地位にある者はすべて礼拝統一法に同意することを公式に宣言しなければならない、と主張した。レイはこの聖約への忠誠の誓約をしなければ、この法律の施行される8月24日後は聖職叙任に関わらず、ケンブリッジ大学のすべての地位から追放されると解っていた。1662年5月8日にレイはケンブリッジを辞職した。

博物学者仲間のフランシス・ウィラビーはケンブリッジでの元の学生であり、裕福な家庭の出であった。彼に伴われて、また金銭的に支えられてレイはイギリス、ヨーロッパを広く調査旅行して植物学と動物学の研究を行ったが、植物を最も愛して研究した。先駆的な編著の『英国植物目録』 (*Catalogus plantarum angliae*, 1670) と『植物の新分類』 (*Methodus plantarum nova*, 1682) で植物を顕花植物と隠花植物、単子葉植物と双子葉植物に分類する基本原理を考案した。レイの用いた専門用語は正確であるため、単子葉植物、双子葉植物などの用語は今日も用いられている。主著は3巻から成り、1686年から8年掛りで刊行された『総合植物誌』である。

イギリス、ヨーロッパを巡る調査旅行では全生物の体系的な記述を試み、動植物に加えて古誌、各地の風俗、習慣を記録した。

2. 『天地創造の御業に明示された神の英知』を著わしたレイの態度

『神の英知』は元々ケンブリッジのトリニティー・コレッジの礼拝堂で行われた学生相手の講話をまとめた教科書であった。初め小さなオクターヴォ版の249ページの本として出版され、初版は500部印刷された。第2版(1692)は382ページ、第3版(1701)は414ページ、第4版(1704)は464ページと版を重ねるごとにページ数は増えた。第2版以降は2部に分かれ、第2版は第1部が206ページ、第2部は176ページであった。19世紀には何度も再刊され、1711~12年に友人のデラム(William Derham)はこの著作を基礎にしてポイル講話を行った。『神の英知』はギルバート・ホワイトの思想の背景にあり、三世代にわたって博物学者たちの思想の背景をもなした。後にペイリーの『自然神学』(1802)にはレイのこの著書からその内容が広範囲に取入れられたが、出典表示なしの無断借用であったので、剽窃ひょうせつと言われる。他のいかなる単行本よりも多く近代科学の真の冒険を教え、チャールズ・ダーウィンの『種の起原』(1859)あるいはフランス唯心論の大成者アンリ・ベルグソンの『創造的進化』(*L'Evolution creatrice*, 1907)の先駆となった。

レイは『神の英知』をどのような態度で書いたのであろうか。

まずレイは序文²⁾の中で次のように言う。「事実または実験については、疑いもなく真実であること以外何も認めないように気をつけた」と。それは自分の講演を砂上の楼閣にしないためであったし、誤ったことが混ざってしまっただけで真実であることに疑念を抱かせないためであった。

これに続けてレイは「私はさらに多くの詳細を付け加えたかもしれないが、むしろ私の聖書の字句は特に目に見える神の御業を全て繰返すことを保証しているし、また私が選んだ御業のみならずすべての御業の構成、秩序、調和および効用における神の英知の足跡をたどることを保証している」と言う。

この講演の議論あるいは内容の有効性、およびそれを選ばなければならなかった理由に関して、レイは一、二付け加えておきたいとして次のように序文で述べる。

「第一に、神を信ずることは全ての信仰の基礎である。(信仰とは神を誠実に崇拝すること、つまり神に仕え、崇拜しようとする心が傾くことである)」。

「第二に、この講話の諸事項は神の存在を証明するのに役立つだけでなく、神の主要な特性の幾つか、例えばとても偉大な能力と英知、を例証するのにも役立つ。極めて多数の被造物、および小さい物だけでなく限りなく大きなもの、すなわち太陽と月、天体のすべては神の全能の結果であり、証明である」。

「最後に、天地創造の御業は称賛、謙虚、そして感謝という感情と傾向とを我々の心に呼び起こし、増大させる」と言う。これに関係しているのは旧約聖書の〈詩篇〉8篇であり、その3節と4節とをレイは引用する。「私はあなたの指の業なる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。あなたが御心に留められる人とは何者なのか、あなたが顧みられる人の子とは何者なのか」と。これらの目的に対して聖書

の詩篇作者は非常に頻繁に御業を列挙し熟考するとし、レイは次のように結ぶ。「御業は私が同種のことを行うのを保証し、このような講話を自然哲学的と言うよりもむしろ神学的と呼ぶのが正しいとするであろう」と講話の趣を述べる。神学的と呼ぶ理由は、自然界の諸事象を具体的に述べ、なぜそうなっているかは神の英知と意図によるからであると説明する。

当時かなりの科学者たちが無神論者であり、それらの人々に神の御業の偉大さと英知とをつぶさに証明し、信仰へと導くことがこの講話の目的であった。レイの同時代にモア (Henry More, 1614–87) という哲学者・神学者がおり、『無神論対抗策』(*The Antidote against Atheism*, 1652) を著わして広教会派、すなわちケンブリッジ大学のプラトン学派の中で指導的な地位を占めるに至った。この書は三書から成っている。第一書は神の存在への哲学的賛成論を扱い、モア自身の独特の考えについての有益な解説を含んでいる。第二書は、そこからレイが多数の引用をし、講話の輪郭を得ているものだが、自然現象からの論証を扱っており、レイの『神の英知』の大きな節の内容の基礎をなし、レイは明らかにモアのこの『無神論対抗策』を出発点としている。けれども、両書には際立った違いがある。一つにはそれぞれの年代が異なり、また二人の気質と見解が相違しているからである。これはモアがケンブリッジでアリストテレスやカルダーノについて学び、優れた学者ではあったが、自分の講話の主題になっているものについてはケンブリッジでほとんど全く訓練を受けておらず、解剖学、解剖を学んだ形跡がないように思われることと関係があるとされる³⁾。

3. 『神の英知』の内容

冒頭でレイは「神の御業はどれほど多方面にわたっているか」を簡潔に見る。次いで創造の御業に創造者の技量が限りなく広範に証明されていることを、詩篇作者と共にたたえる。レイは自然界の被造物をまず生命のあるものと無生物とに分ける。無生物は天上界のものと地球上のものに分ける。天上界については目に見えるものから、と言って太陽から始めて太陽系の天体を概観する。宇宙は無限ではないが、星はほとんど無数にあり、改良された望遠鏡によっても発見されている星の数は無数である。星の中では恒星が太陽系の中心であるとする。

生命のあるものについて、草本のような植物か、獣類、鳥類、魚類、昆虫のような感覚のあるもの、あるいは人間のような理性的存在がある。レイは獣の種を150種以上にはならないとし、これには蛇類を含むとする。鳥類は500種近く、昆虫は10,000種以上とする。そして、これらの数の大きさ、驚くほどの多様性と幾つかのタイプの環境への適応についてコメントを加える。

次にレイは自然界の秩序について、神の目に見える御業とその区分を概観し、「原子仮説」に基づく興味深い一節を話の前置きにするが、その中では一様性と原子の多様性とは退けている。レイが原子説にかなり傾いているのは「元素と呼んでいる物体が混合物の唯一の成分ではないからである」と言う (p. 42)。「神の御業について、その成立ち、

秩序と調和、またその目的と用途に認められる神の英知を何がしか述べることにする」と言って、まず不注意で無関心な観察者の目にもさらされ、気づかれもしている明らかなものに主として注目して手早く見直す。「第二に、特別なものを一、二選んで、それらをより正確に検討する。もっとも、これらの中にさえ最高に念入りに調べても分からずに、我々の注意から漏れてしまうものもある」と述べる。というのは、我々の目と感覚とはいかに補強され、助けられても、あまりにも鈍感で好奇心をそそる造物主の技量を明瞭に理解することが出来ないから。あるいは物体を構成している微細な部分を理解することが出来ないからである。「われわれの理解しているところはあいまいで弱過ぎ、限りなく賢明な造物主がそれらの物体に予定した目的と用途のすべてを知り、十分に把握することが出来ないからだ」と言う (p. 40)。

すでに記したような自然界の区分を利用してレイは各論に入るが、それは一般に容認されている意見に従い、理解と記憶とを容易にするためであり、その意見が自然哲学の真実と正確さに一致するものとは考えないのである。

〔天体〕天体を最初に扱うに当たっては、レイはコペルニクスとガリレオの「新しい仮説」(宇宙観)を熱心に受け入れており、その適正な方法が完全に発見されれば、星と太陽の諸問題を説明してくれるだろうと予言する。

まず、太陽ほかの天体の運動の均等性、不変性、周期と回転運動の確実なこと、それぞれの秩序と状態の一致は、神の英知と悟りによって定められ、支配されているものであり、その大いなる英知は人間が容易に推測したり理解したりすることが出来ないものだ、と述べる (p. 45)。

太陽、月、惑星、恒星、それに古代人の見方を交えてそれぞれの特徴と有用性とを述べ、歴史家の誤りを正す。太陽は巨大なる火の球であり、地球上の生命は、健康を増進し活力を与えてくれる太陽の光が無ければ、命あるものも自然界の動きもすべてすぐに止まり、下界には暗黒と死のほかには何も残らないであろう。それで、天地のあらゆる被造物の中で古代の異教徒は、正当な理由ではないのだが、太陽を神として崇拜する最高の理由はあった。なぜならば、太陽は被造物の一つにすぎず、神ではなかったからであると。我々キリスト教徒はこう考えるとして、地上に生きる動物、それも主として人間の助けになることが太陽を創造したことの一つの目的であり、太陽が無ければ動物も人間も存在しえなかったことが解る、と言う (p. 47)。

月は一定の、規則的運動によってわれわれが時を分割する助けになり、太陽の光を反射して夜空を明るくし、わが国の冬の憂鬱な暗闇を幾分か除いてくれる。ほかに月は潮の干満を少なくとも調整し、人間の漁業と航海の役に立つことなどが述べられる (p. 48)。

その他の惑星については、その運動の道筋、回転、定位置と逆行とは、幾時代にもわたり、最も明確な時期に絶えず観測されており、その運動が(造物主の)計画、英知、理解によって実行され、統御されていることを十分に証明している。

似たようなことが、運動が規則的で等しく、一様で不変である恒星についても、言え

よう。それで、造物主の偶然、慢心、手違いを証拠立てるものは何も天には見られないのだが、規則、秩序、不変性、また英知の結果と証拠は見られる。

それゆえ〈詩篇〉19篇1節の言葉を以て締めくくることが出来るとして「天は神の栄光を宣し、大空は御手の業を示す」が引用される (p. 51)。〈詩篇〉はレイによって随所に引かれているから、レイの文章は詩篇作者の大いなる叫びでもあると言ってよい。

天地創造に関して地球の形状、運動、構造などについて述べ、地軸の方向は水平面に対して垂直で、北極星に対して安定的に平行であると言う。当時は地軸の傾斜していることは知られていなかったであろうが、自然の中で真に確立された地軸の最良の位置は神の「英知、意図、摂理の問題である」とする (p. 50)。このように「神の英知、意図、美德、デザインの結果」であるというような説明が、この後随所に出てくる。とりわけ人体についての記述の部分ではそれが顕著に見られる。

〔地球上の単純無生物〕ここでは四大元素（火、水、地、空気）について考える。レイがこれを元素と呼ぶのは（前にも言ったように）俗に受け入れられている考えに従ってのことであり、地球上の他のすべての物質の素または構成要素と考えるからではない、と改めて言う。

まず、火はその熱によって大事にされ、生命を蘇らせる。火が無ければ万物が動けず、いや実のところ、火が無ければ生命が存在しえない。火は身体という機械を動かし続ける、血液中に存在する生命の炎だ、と言う (pp. 52f.)。

次に、空気は人間とすべての動物が呼吸をするのに役立ち、生命の炎の燃料を含み、空気が無ければその炎は活気をなくし、消えてしまう、とレイは言う。空気は人間と他の陸生の動物にも必要なもので、それが無ければほんの数分間も生きていけない。それは魚や他の水生の動物にも言えるとして、レイはその裏付けに幾つかの実験を付け加える。例えば狭い口しか空いていない容器に水を満たし、その中に魚（アンコウイワシ）を入れ、その口を手でふさぐか何か覆いをして空気を全く遮断すると、魚は直ぐに窒息死してしまう。もしも水を容器の口までいっぱいに入れず、上方に空きを作っておくと、狭い口をふさいでも魚は最上方に上がってきて直ちに困難と闘おうとする。

第三に、水は一つの不可欠な要素ではあるが、全く栄養物ではなく、全ての産物中の物質に最大限に関与するものである、とする。洗濯、入浴、食べ物の下ごしらえ、調理など卑近な用途は言うまでもない。しかし、水の大きな入れ物である湖沼、および乾燥地における湧水と河川の分布を考えるならば、神の英知と理解との十二分な理由が思い浮かぶであろう。

最後に、大地は動植物すべての基礎であり、維持するものであり、動植物に主要部の堅固な部分を与え、人間には食物、栄養、またある程度は着る物をも与えてくれる。地表の地形はなんと様々に造られ、素晴らしい景観をなしていることか。草本、堂々たる樹木の有難い緑は森や林となり、美しい花を咲かせ果実を実らせる、と述べる (pp.62f.)。

これらもまた神の力と英知を示すものであり、したがって〈箴言〉^{しんげん}を以てこの箇所を

結ぶことが出来るとして3節19行を引用する。「主は英知を以て地に基を据え、悟りを以て天を定められた」のであると (p. 63)。

〔気象〕雨と風について述べているが、まず雨は水が太陽熱によって非常に小さな目に見えない粒（水蒸気）となって大気中に上り、冷やされて次第に水滴（雲）となり落ちてくる、と現象を説明する。雲は風によってあちこち運ばれ、ほとんど均一にまき散らされるので、地上のどの地域にもわか雨が降らない所はない。もしも神意の特別な介入によって雨を降らせないことが、民族に対する罰として神を喜ばず場合を除いてか、あるいは、もしもどこかの地方に雨が降らないならば、何か別の方法で水が埋合せをする。例えばエジプトには雨はめったに降らないが、川の毎年の氾濫によって豊富に償われる。雲と雨のこの分布状態は私にとって神の意向を大きく理由づけるものである。というのは、さもなければ、幾つかの地域ではなぜ多年にわたり絶えず日照りが続き、全く人口を減少させてしまうのかが解らないからである。他の地域では雨が降り続けると、ついには川が氾濫し人を溺れさせてしまう。このようなことは、雲が思いがけない動きをすれば、しばしば起こる。ところが、歴史の最古の記録以来、そのような日照り、あるいは洪水のことは何も読んだり聞いたりしていない。それは恐らくキプロスの歴史が無ければの話であろう。キプロスでは36年間雨が降らなかったのも、ついにこの島はコンスタンティヌス大帝の御世にはほとんど全く人が住まなくなってしまった。

さらにまた、雨の降り方を考えるなら、次第に水滴になって滴下するのだが、これは地上に給水するのに最も都合が好い。ところが、もしも雨が川のように切れ目のない流れとなって降るならば、土地を浸食し、植物を根こそぎ洗い流し、家々を引っくり返し、動物を窒息死させないまでも大変困ったことになる。もしも、こうしたことや付け加え得るさらに多くのことを考えるならば、この点でもまた使徒とともに次のように叫ぶ。「神の英知と理解の深い豊かさよ！」と (p. 65)。

次は、風である。風の効用が幾つあるかを列挙することは容易ではないが、出来るだけ多くを挙げようとする。風は大気の流れさせ、その流れを乱し、不快で有害な蒸気を分散させるのに役立つ。さもなければ空気は淀んで、動物に多くの病気を生じさせる。その結果、地上により都合の好い水の供給をするために、雲をあちらこちらに運ぶ。過剰な熱を和らげることが分っているのだが、ブラジル、ニュー・スペイン〔西半球の旧スペイン領〕、近隣の島々、および赤道近くの似たような他の諸国では、人々は涼風の恩恵を受ける。船の帆いっぱい風をはらませ遠くの国々に航海させる。そのようにして遠く離れた国同士の通商を発達させ、地球の隅々まで明らかにし、地理と自然史を完全なものにすることは人類にとって際立った利益であるから (p. 66)。

家々を倒壊させ、町中を壊し、樹木を根こそぎ倒し、森をなぎ倒すなど、大風による災害は偶然の結果であるか、あるいは同様なすべての場合に働く優れた神の力によって和らげられなかった、単なる自然の原因によるものであろうと考え、これら諸々の事柄はすべて、神の宝から風をもたらす英知と優しさを表すものであるとする (p. 66)。

〔混合無生物〕この呼称は確かに不適切である、とレイはまず断わる。この無生物の多くは元素と呼ばれるものと同じく単一である。(宝)石、金属、鉱物、塩がそれである。

(宝)石ではまずその特質を、次にはその注目すべき用途を述べる。特質で第一に例証したいのは色であり、あるものは最高に明るい色で、きらめき、美しい。赤く輝くのはざくろ石またはルビー、青く輝くのはサファイア、緑色に輝くのはエメラルド、黄色または金色のはトパーズ(黄玉)、あるいは古代人の言うところのクリソライト(橄欖石^{かんらんせき})、あたかも赤ワインで薄く色づけしたようなアメシスト(紫水晶)、光にさらされると、薄い琥珀織のように色の変化が多様なオパールがある(p. 67)。

次に硬さの点で宝石は他の物質すべてをしのぐ。ダイヤモンドほかの硬い物質はすべて硬いがゆえに、その階級に高められており、人工的に模造品を造ろうとしても無駄である。偽物造りによる人工宝石は普通の宝石通によって容易に見破られてしまう。

第三は形で、多くの宝石が整形に成長する。例えば水晶と異常に大きいダイヤモンドは六角形(六方晶系)になる。他の石はもっと優美で、複合した形になる。あらゆる種類の有殻の魚類の殻、サメの歯や脊椎骨などを模した形で形成される。もしも初めから宝石、すなわち殻や魚の骨を模した、自然の第一級の産物があるならば、それは石化した殻や骨自体ではない。あるものはサンゴ、海綿(動物)、クサビライシのように一種の植物や植物に似た形をしており、灌木のように岩の上で成長する。これらに普通の星状光彩の石とウミユリの化石を加えてよいであろう。これらは一種の岩石植物と見做す。

用途に関しては、あるものは建築に、多くの種類の容器、用具として役立ち、柱、像、その他の浮彫細工として、寺院、宮殿、屋根付き玄関、屋根付き回廊などに用いられる。軟石、大理石がそれである。あるものは白亜、石灰石のように焼かれて石灰になる。あるものはケルプ(灰)などと混ぜてガラスを造る(pp. 67f.)。

鉄の磁力は古代人に知られており、地球の両極に対して反転する力と方向は後になって考え出されたものである。これが大航海時代のような最近二、三の時代に限りない利点であったのは、航海術が大いに改良されて通商が発達し、遠く隔たった国々を容易に到達できるものにし、広大な大陸あるいは新世界、加えて未知の王国と島々を多数発見したことは素晴らしいことであった。地球の天体としての丸さという古代の問題を実験的に解決したこと、対蹠地^{たいせきち}の存在、酷熱の地帯が住むのに適しているかどうかということ、および水陸から成る全地球を周航可能にすることを十分に証明している。ところが、昔、人々は海岸沿いに航行するのが習慣で、海岸に沿ってゆっくりと移動し、ケントの土地から危険を冒して出るのを恐れた。その時代には北極星とその近くの星々を除いて他には何の指標もなく、曇天では指標は何もなかった(p. 70)。

金属に関しては、非常に多くの面で人類にとって有用であり、それらは万人によく知られている。鉄、真鍮^{しんちゆう}、鉛などは最も必要とされるが、最も普通に見られ、多量に産する。他の金属はより稀少で、節約して使われるのが良い。しかし、そのために他のすべての産物の価値の共通の尺度と基準となるのに適格であり、貨幣として役立つ。これはすべての時代を通じて、あらゆる文明国が用いてきた。なかんずく金はその素晴らし

い可鍛性と重さなどで注目に値する。

金属に関してただ一つ付け加えたいのは、金属は頑強にすべての変化に抵抗するということである。時々人は考えるだろうが、金属は異なる物体に変化する。しかし、変化するのは言わば幽霊または魔術師の陰に隠れるのであり、古代ローマの火と鍛冶の神、および腐食性の液による拷問的苦痛にもかかわらず、自然の形と外観にまた変わる。

実際これら地球上の無生物について一般論を述べれば、無生物には動物の体のような部位の組織が無いし、非常に複雑な様々な組織も無いけれども、そのように無生物を生み出すのは、微小な粒子、すなわち自然には分割できない原子に分けられる物質に関する仮説によって一見そつなく説明されよう。

この仮説によれば、原子の形は様々だがその数は一定しており、恐らく量の大きさにも違いがあり、これらは運動をし、確立された法則あるいは規則に従って絶えず動かされている。無生物が造られた効用を明確に見出すことは出来ないが、他の存在目的の中に、それらが人間や他の動物に役立つ目的のために造られたと恐らく結論できよう。ここで注意しなければならないのは、上の仮説に従えば、同じ形と規模である数種の原子の数はほとんど等しくないということである。しかし、他の種の幾つかの種の方が原子の数が限りなく多いということがある。例えば、金属や鉱物を構成するものよりもずっと豊富に存在する空気、水、土壌の莫大な集合体を形成する原子のようである。それについての理由は恐らく、それらが人間と他のすべての動物の生命と存在にとって必要なものだからであり、したがって常に手近になければならないからである。これらは人間にとってのみ有用であるばかりか必需品としてよりもむしろ便利な物として役立つ (p. 72)。

物体を構成する微粒子が我々の用いることのできるいかなる自然力、火それ自体によってさえも分解し得ない理由は何か (火は唯一のカトリックの溶剤であり、他の溶剤はすべての溶体における効果的な物質であるよりもむしろ媒介物であるが) それらの部分の形と小さいがゆえに、(ちょうど楔が木材を割るように) 他の物体を切り分ける傾向があるのは火あるいはその熱によって動機づけられるとき、火は他には有効なものを全く持たないし、楔は槌によって打ち込まれない限り、有効性を持たないのと同様である (p. 73)。

さて、ここで体の中の例を引こう。その中にある微小な部分は火の力によっても壊れないように見えるが、それは普通に見かける水であり、これは蒸留し、沸騰し、循環し、火でいかに溶解させるかに影響を与えるが、ただ蒸気に溶解させることが出来るだけである。蒸気は、動きが止まると、再び容易に水に戻る。蒸気は微小な要素以外の何ものでもないの、熱されると揺り動かされ、他と分離される。別の例では、最高に学識があり、経験もある化学者が水銀は変色しないと主張し、それゆえ永遠の液体と呼ぶ。また、同じことはすべての単純な物体に当てはまる、と考えており、そういう物体の構成粒子はいかなる自然作用物によっても溶解しない、とその考えを述べる (p.73)。

〔植物〕これについては第1項でケンブリッジにおけるレイの植物研究の要点を記したが、『神の英知』では「野菜と植物」の項で述べられているレイの豊かで示唆に富む考えを補足する。自然は偶然でも恣意的なものでもないことを一連の問いの中で示そうとする。それぞれの種は関係のない土に移しても、なぜ同じ葉、花、果実、種子を生み出すのか。それぞれの種には固有の生長と大きさがあるのはなぜか。葉の状況が「対生であったり互生であったり、輪生」であるのは何によって決まるのか。「葉の基部または枝の先に単独または一緒に咲く」状況を何が決めるのか。「葉と花卉の形、雄しべとその先端の形と数、花柱と果実の形、花柱が分かれる花粉室の数」を決めるのは何か。それは植物の有機的営みをすべて理解し、調整しているであろう聡明で創造的な造物主のなせる業である、というのがレイの考えである。

〔動物〕動物は敏感な魂を備えた体を持っており、哺乳類では授乳、鳥類については産卵、採餌と給餌、巣と育雛、外敵に対する防衛、防御のための体制について述べる。その例としてモグラが隠れる穴を地下に掘るための前足の鋭い鉤爪^{かぎづめ}を挙げる。採餌の例ではオオアリの長く尖った頭部^{かみ}と吻は、木の幹の中のアリの、粘着力のある唾液の付いた長い舌で舐めとるのに都合がよい。同様に採餌に長い舌を使うカメレオン、キツキもすべて造物主である神の英知によるものとする。

空を飛ぶ鳥類は飛行に適した体の構造を持ち、魚類も水中を泳ぐ生活に適した体形と構造をしている。またビーバー、カワウソ、アザラシ、ミズネズミ、カエルなど、水陸両方で生活をするものについては体の構造、生息環境に適した習性などについて、アリストテレスを引用しながら説明する。

〔人体〕レイがもっと正確に調べ、考察しようと選んだのが人体である。「神の英知と美德」は人の直立姿勢に現れている。この姿勢は人に与えられた特権であり、利点である。しかし幾つかの利点は多くの動物にも与えられているので、「私の務めは人間と共に他の動物にも共通するが、神が人体に付与された天分と特技についても考察することである」とレイは言う (p. 151)。

人間の直立姿勢について神の特別な恵みとして古代の人がすでに注目していた。その例証としてオウィディウス (Ovid) の『変身物語』(Metamorphoses), Iが引用される。

人間の直立姿勢の利点は脳が詰まっていた非常に重い頭部を支えるのに適していることである。人の脳は体のかさの割にははるかに大きい。もしも頭が水平面に平行しているか前に傾いていたならば、その重い頭を運ぶのは非常に苦痛であるか、くたびれる。また、この姿勢の利点は遠くを見渡し、周囲を見回すのに都合がよい。前方を見通せることは危険を避けるのに少なからぬ利点となる。

もしも人間が四足動物すべてのように四足で立ち歩くことを常に余儀なくされた場合のことを考えれば、この姿勢の大きな利点はより明確に理解できよう。さらには手を使えることの利点が高い。手は図り知れない貴重な道具であり、これが無かったなら、

人間が理性のある動物として享受している利点をほとんど欠いたことであろう (p.153)。

4. 神の英知と摂理

レイはこれまでも宇宙の成立ち、天体の運動、動物と植物の形、構造、各器官の働きなどについての説明で、それは神の英知、意図、デザインの結果であるということをししばしば述べてきた。このことは人体の説明に至って頻繁になる。

人体の部位と器官の位置はそれぞれ外見、用途、相互補助に^{かな}適うように位置している。例えば目、耳、手、足などがそうである。

外見が良いように、それらの器官の多くは（鼻孔、乳房を含めて）同じ高さで両側に位置し、役立っている。一对の各器官は相互に助け合う関係にあり、万一、事故などで片方が損傷したり機能不全に陥ったりすれば、他方がかなり良く役立つであろう。これがもしも一つの目、一つの耳しか無かったならば、すべての機能が失われることになる (pp. 158, 162, 214)。

主要な器官はすべて数、形、位置、構造が定まっていて改良の余地がない。人体がもしも偶然に出来たもので、神の意図と摂理によって造られたものでなかったならば、そういうことはあり得ないであろう (p. 164)。

個体維持と保存、および種の存続と繁殖に必要な行為に付随する快樂には造物主の偉大な英知がある。そのみならず、それらの行為を忘れてたり慎んだりした場合には、苦痛を与える。例えば、飲食には快樂が伴う。食物を嚙んだり嚥下することはめんどりで、有難くない仕事である。しかし、飲食を忘れないように神は飢えという苦痛を差し挟むことによって、それを人に思い出させる (pp. 165f.)。

人の顔つきについては、レイは次のように言う。人の顔の特徴は多様なので、全く似ている顔は世の中に二つとない。これはちょっと不思議なことだが、なぜならば、同種のものでは不可欠な要素はすべて同じだからである。この考えの補強としてレイは大プリニウスの『博物誌』から引用する。「実際、神の能力と威厳とは常に信を置けるわけではない。もしも人の心が物事の全体ではなく部分のみを受け入れるならばである」として、「何千という人間の顔の中ではっきり区別がつかないものは10かそれよりも少し多いだけである」と言う (p. 168)。

次いで人体を細かく見てゆくとして、まず頭蓋骨内の脳を温め、頭蓋骨そのものを保護する毛髪について短く触れる。

目については詳しく述べる。目は用途、装飾性、安全確保の点でこれに勝るものはない。人の心は何よりもすぐに、強く目の動きに現れる。外在物は目に映じる明確で生き生きとした像によって感じ取られる。目の構造、物が見える仕組み、また水晶体、角膜、ぶどう膜（虹彩、毛様体、脈絡膜の総称）などの主要部分について説明する。網膜に映じるのは倒立像だが、知覚神経によって正立像として心に描かれる、と述べる (p. 177)。

人の目は第七番目の筋肉である瞬膜を欠いているが、これを欠陥と見做す必要はないと言う。草食動物は草を食むために長時間下を向いているので、瞬膜は非常に有用であ

るが、人間は頭を長く下げている姿勢をとる必要がないので、そのような筋肉を必要としない (p. 183)。懸垂する膜については鳥類のすべて、ほとんどの動物に備わっており、その用途は何かと、レイは長いこと疑問に思っていた。それは時には目の保護と安全のためと考えたが、なぜ神は人間よりも動物の目の保護を望むのかに対するまずまずの説明をするのについては戸惑った (pp. 183f.)。しかし、ロバート・ボイルの説明を借りて次のように言う。カエルなどの両生類は跳んだり跳ねたりする際に、生息する水辺のイグサのような先が尖り、縁の鋭い植物が目に入る危険を防ぐためであると。鳥類も同様に瞬膜が備わっているのは樹林や藪の中を飛ぶのに小枝、とげ、木の葉などで目を傷めないためである、と説明する (p. 184)。

人体の主要な内臓の一つである心臓については、絶えず動いて血液を全身に送り、器官のすべてを活性化し、栄養分を与え、温く柔軟な状態に保つ。この生命と体温の源から体の最も離れた最小の部分にまで到る道筋と導管とがあるとは驚くべきことではないか、とレイは言う (p. 194)。

心臓の機能を説明した後、その機能を遂行するための構造が説明される (pp. 195f.)。

その後、手の指の動きと構造、残っている部分の背骨、胃、膀胱、肝臓について簡潔に述べてからこう言う。「人体の骨、筋肉、血管のすべてがみごとに巧みに設計されているので、一つの器官だけの形、状況、つながりを変えたり、容積、規模を減らしたり増やしたりすれば、改善する代りに損なったり駄目にしたりしてしまう」と (p. 206)。人体のすべての器官の働きは協同しており、互いに助け合ったりして、すべてが一つの全体的な目的と計画の点で一致する。

われわれの身体が完全で申し分のない出来であることに対して神に感謝を捧げよう、とレイは言う。神をほめたたえよう、われらの四肢と感覚器官、そして一般的に人体のすべての部分の数、形、用途が然るべきものであることに対して。神を祝福しよう、人体が健全な構造であることに対して。何かの事故で手足や感覚器官の片方が奪われたりすると、正常な状態がいかに優れているかが解る (pp. 213f.)。

この後、特に悪から護られ、悪事を働くことを抑制されている器官として目と舌の二つが挙げられる。その説明には聖書からの引用が多用される。

まず、目である。神がそう考えると、ダビデが祈ったように、われわれは「目をそらして、^{むな}虚しいものを見ないようにし」なければならない (〈詩篇〉119章37節)。われわれはヨブがしたように「目と契約を結ば」なければならない (〈ヨブ記〉31章37節)。「おごり高ぶる目」がある。「このような人々がいる。おお、その目のいかに高いことよ。また、その^{まぶた}瞼のいかにつり上がっていることよ」(〈箴言〉30章13節)。「高ぶる眼」は神の嫌う六つのことの第一と見做される (〈箴言〉6章17節)。(詩篇作者は言う) 神は高慢な、あるいは「高ぶる目を低くする」(〈詩篇〉18章27節)。「高ぶる目と高慢な心の人には耐えられない」(とダビデは言う) (〈詩篇〉101章5節)。そして主は自らについてこう言われる。「主の心はおごらず、目は高ぶることもない」と (〈詩篇〉131章1節)。これらの箇所から、高慢はとりわけ目に現れ、目は言わば高慢の座または玉座であるという

ことが明らかになる (p. 217)。

目には好色な目があると、預言者イザヤは〈イザヤ書〉13章16節で言う。エルサレムの「娘たちは首を伸ばして歩き、好色な目で見るから」と。使徒ペテロは〈ペテロの第二の手紙〉2章14節で不倫に溢れた目について言及する。目という窓から、心を刺激し、淫らな思いを掻き立てるようなものが入ってくる。同様に心の中の不純な思いも目の動きによって分る。したがって、この点で目と契約を結ぶために聖ヨブとうまくやり、極端な欲望に誘うようなものはいかなるものも、じっと見つめることのないようにする。救い主はこう言われる。右目に罪を犯させるよりも右目を引き抜いてしまうほうが良い、と。「情欲を抱いて女を見る者は、すでに心の中で姦淫したのである」(〈マタイによる福音書〉5章28節)。レイはこの後貪欲な目について述べ、「目の煩惱」(〈ヨハネの第一の手紙〉2章16節)によって、誘惑あるいは欲望をそそるものは目から入ることを改めて言う (p. 218)。

次には、救い主が「邪悪な目」と呼ぶ妬み深い目がある。〈マタイによる福音書〉20章15節には次のようにある。「私が気前がよいので、汝は妬ましい目をするのか」。自分以上に他の人が利益を得ることを良しとせず、不満を覚えたり腹を立てたりする。妬み深い人は他の人が栄えるのを見ることに耐えられない。また、他の人たちのほうが自分の条件よりも良いと考えがちである。実際はそうではないのにである (p. 219)。

レイはこう提唱する。目によってこれらの不品行が知られないように目を抑えよう。目の謙虚さと汚れの無さが目つきにさえも現れないようにしよう。おごり高ぶりも煩惱も目の状態と動きに現れないようにしよう。目が前述のいかなる不品行の入口にも出口にもならないように、また眼が誘惑の入るのを許すことも心に抱いていることを表すこともないように注意しよう。

神の言葉と他の良い本を読むのに目を使おう。知識を増やし、習慣的行いの方向を定めるために。天地創造の御業を念入りに考察し、熟考する際に、神の英知の足跡が御業の成立、性質、意味で容易にたどれるようにしよう。個人的なものであろうと国民的なものであろうと、我々自身が他者に対しての神の摂理の非凡な出来事と結果とに注目しよう。それらのことは神の恵み、あるいは正義の結末であるので、我々の心に感謝または不安という感情を掻き立てるであろうから (p. 220)。

5. 話す道具としての舌についての記述

レイが言及したいと言うもう一つのは舌である。舌は話すことの重要な道具であり、話すという行為を遂行するのに良くも悪くも用いられるので、指示と抑制とを必要とする (p. 221)。

舌をより良く支配するために、注意深く避けなければならない話し方の悪習としてレイが指摘する幾つかのうちの第一に挙げるのは多弁である。舌は唇と歯という二重の仕切りによって囲われ、保護されており、言葉が性急に、無分別に口から出てしまうことのないようになっている。神は二つの耳を与えてくれたが、舌は一つであるから、話す

ことの二倍聞かなければならないということを暗示する。多弁はなぜ避けなければならないか、その十分な理由を賢者は教えてくれると、レイは〈箴言〉10章19節から引用する。「言葉が多ければ科^{とが}を免れることはない」。〈箴言〉にはこれに続いて「唇を制する者は賢明である」とある。また〈伝道の書〉5章7節には「夢と言葉が多ければ空なる言葉も様々にある」とある。これに付け加えてレイは言う。ほとんどの人を説得する力があり、多弁は愚考の結果であり、証拠でもあると見做されてきたものを加えよう、と。〈箴言〉5章3節の「愚かなる者の声は多くの言葉によって分る」と引いた後、レイはこう言う。「逆に言葉少なきことは賢明であることの表れである。口数を少なくしていただけるほど賢明な者は、愚者であっても見逃されよう。多弁な人は必ず無作法であるに違いなく、多くの無駄な言葉を話すので、仲間には厄介者扱いされ、嫌われる。また自分自身や他人の秘密を漏らして、自分で大変な迷惑を被ることもある。ひとたび言葉が発せられると、その結果が何であれ、取返しがつかないから。したがって、我々は口に見張りを立て、唇に戸を立てておく必要がある。そうすれば自分の言葉に苦しむことはない (p. 222)。

レイが言及したいことの第二は嘘をつくことである。人をだますことと嘘をつくこととは異なる。嘘をつくことは言ったことに逆らって進むことであり、語源としては良いものではないが、事柄の概念としては良い。つまり、心に思うことに反して考えていないことを話す。ホメロスが言っているように、心の中にあることを隠し、口では別なことを話す。したがって、真実でないことをしゃべろうとも、嘘はついておらず、真実を話そうと思えば話せる。見方を変えれば、真実ではないと思うことを話す時には、かなり本当のことを話すであろうが、嘘は話していない。言葉は心の指標となり、話すことは考えていることの説明役となった。であるから、言葉と話すことの間には完全な調和と考えの一致がなければならない。それゆえ、嘘をつくことは話すことの悪用であり、話すことの目的、すなわち考えていることを人に伝えるという目的そのものを歪曲するものである。

神にとっては〈箴言〉6章16、17節にあるように「嘘を言う舌」は「神にとって忌み嫌うこと」の六つあるいは七つの一つである。ホメロスが、前に引用した詩に先立って証言しているように、嘘を言う人は地獄か死の門と同じく憎むべきものである。——嘘を言うことは悪魔の所業であり、そういう行いをする人たちは悪魔の子である。〈ヨハネの福音書〉8章44節で救い主は言う。「あなた方は悪魔を父とする。彼は偽りの人であり、偽りの父であるからだ」と。終りは天国から排除し、精神を地獄に落す罪である。〈ヨハネによる福音書〉21章8節に次のようにある。「嘘を言うものはすべて舟で湖に出て、陸に上って炭火を起す。これが第二の死である」(p. 224)。

第三は、言葉のもう一つの悪習、あるいは乱用、つまり舌が手段である非難すべき行為は人を中傷することである。それは誰かについて、その人の面目を失わせるような虚偽の噂を立てることである。これは我々の隣人にとっては非常に大きな侮辱であり、世間の評判は人々にとっては生命そのものと同じほど大事なものである。それゆえ、これ

は庶民の間では諺になっている。「わが名声を取上げるならわが命をも奪え」(p. 224)。

四番目に挙げられる猥褻^{わいせつ}で不純な言葉は舌のもう一つの非難すべき効果である。慎みのある耳は嫌悪し、そのような言葉は聞く人を墮落させ、腐敗させるのに資するだけであり、キリスト教徒であることを自認する人すべてによって懸命に、注意深く避けられるべきである。〈エフェソの信徒への手紙〉5章3節にこうある。「また、不品行やすべての汚れを、聖徒に相応しく、あなた方の間では口にすることさえしてはならぬ」と。

レイが五番目に挙げるのは、呪い、ののしりである。人を罵倒することもまた言葉の大いなる悪用であり、悪意と邪悪な心の非道な結果であり、表現である。「その口は呪いに満ちている」(〈詩篇〉10章7節)と詩篇作者は呪い、ののしりを邪悪な人の性格の一部にしている (p. 225)。

六番目に挙げられるのは毒舌と普通の談話で、神の御名を不敬な使い方で用いるのは舌のもう一つの悪用である。レイはこれに、悪賢く瑣末的な事柄の際に、断固として主張することを加える。真実でないか恐らくは嘘であることの証人に神になってもらうこと、またすべての瑣末的な事柄やありふれた話で、言うことをよく考えずに神に習慣的に訴えることは、神に対する最高の無礼であり侮辱であり、神を恐れぬ罪である。これは信仰を得ることには程遠く、むしろ自信の無さと不信とを生み出すからである。信仰は理性を示して嘆願することの出来る唯一のものである。「ののしる人は嘘をつく」という諺がある。神の戒めの一つを破ることをためらわない人は、他の戒めに背くことを気に病みそうにないからである (pp. 226f.)。

最後に挙げられているのは下劣な言葉、嘲りとひやかし、軽蔑と愚弄^{ぐろう}であり、これらは言葉の悪意のある乱用として厳しく非難されねばならない。嘲りと愚弄とは軽蔑から生じるもので、しかも人々の受けるあらゆる不当な扱いのうちで最も耐え難いものである。したがって「人にせられんと欲するように人にもせよ」というキリストの教えを実践する際の習わし全般にこれ以上に背くものはない。詩篇作者は嘲られることの耐え難さを自らこう訴える。「私は彼らの諺となった。門に坐する者は私をそしり、私は酔いどれの歌となった」(〈詩篇〉69章11、12節)。「下劣な言葉が一緒になって思いがけない私に向けられ、彼らはしかめっ面を私に向け、ののしることを止めなかった」。また〈エレミヤ書〉20章7節には「私は毎日、物笑いの種になり、誰もが私を嘲る」とある (p. 227)。

では舌はどのように使われねばならないか。答えはまず、神への賞賛と感謝に使われるべきである。〈詩篇〉35章28節には「私の舌にはひねもす主の正義と賛美とを語らせよ」とある。これに一致するのが〈詩篇〉71章24節である。実に詩篇は大いに舌のこの義務の実践、あるいは推奨の言葉にすぎない。その2は主の驚くべき御業を語るのに舌を働かせなければならない。その3は神への祈りに舌を使うこと。その4は自らについて、また信仰についての告白、および危険が何であろうと人前でそれを認めることに用いる。その5は他の人たちに教え、助言することに舌を使う。その6は人に訓戒することに。その7はそれを必要とする人を慰めることに。その8は人を叱ることに、という

ように舌に関することのみを採り上げて簡潔に言及する (pp. 228f.)。

レイは次に精神を高く評価し、重んじることを然るべく学べと述べる。身体がそのように非常に優れたものであるならば、では精神は何であるのか。身体は外殻にしかすぎず、精神は核心である。身体は樽形の容器にすぎず、精神はその中に入っている貴重な酒である。身体は宝石箱にしかすぎず、精神は宝石である。身体は船にしかすぎず、精神は舵手である、というような具体的な例から精神と身体との間の優越性には違いのあることが解る。われらの良い方の部分である精神は我々が最大の注意をして念入りに、それに対する備えをする。これに対して身体的備えは半分の備えにすぎないが、一人の人間の一部分にしかすぎず、人生の時間だけを考えるならば、それはより劣った、より卑しいものでもある。この世の後の無限の継続時間という未来の状態を考えるならば、身体的備えは4分の1の備えとは言わないまでも、非常に短い時期であり、永遠という無限の時期とは全くつり合いが取れない (pp. 229f.)。

ある哲人たちは身体が人間の欠かせない部分であることを認めようとしなが、精神の容れ物または媒体であることだけは認める。「精神は全く個人個人のものである」と。レイの考えはこれと大いに異なるわけではないが、身体が劣った部分であるにすぎないことはどうしても認めなければならない、と言う。それゆえ、身体は非常に平静に保たれ、理性の命ずるところに従い、精神に従順であるように食べ物を与えられ、それは前以て用意されるという扱いを受けるべきである (p. 230)。

身体を偏愛し、精神を軽視することは、どちらを我々が好むかを明らかに示している。我々は自らの体を傷つけたり、損なったりしないように十分に注意しているが、毎日大胆にも精神に鞭打ち、傷つけようとする。我々の犯す罪はすべてその性質とは逆に、精神にとって本当の鞭、いや致命傷であり、もしも良心がひと度目覚めてその刺すような痛みとうずきを感じるならば、そのことに気づくであろう。我々は身体を苦役と奴隷のような束縛から護るに十分なだけ勤勉であるけれども、精神が煩惱の奴隷となり、あくせく働く人になることは何とも思わないので、最も退廃した生き物である悪魔に不愉快極まりない屈従をして生きることになる。我々は十分に節約的で用心深く、またよく考慮して身体に役に立つようなものを手放すようなことはしないし、人体を評価しているから持たねばならぬもの的一切をどうしても手放すようなこともしない。

では精神にいかん留意するかと訊ねられれば、身体にするのと同じことを精神にも行う、とレイは答える。1) 身体には食物を与えるが、精神にも食物を与える。精神の食物は知識である。とりわけ神の事柄の知識であり、その永遠の安らぎと幸福に関わる事柄の知識である。キリスト教の教義、神の言葉は次のように表現され、説かれる。「今生まれた乳飲み子のように、混じり気のない霊の乳を求めなさい。それによって育ち、救いに入るためである (〈ペテロの第一の手紙〉2章2節)。「あなた方は堅い食物ではなく、乳を必要としている」と〈ヘブライ人への手紙〉5章12節にある (p. 232)。ここで言う乳とはキリストの教えの本質である。

身体の内部に病気があったり、外側に傷を負ったりすると、我々は病気や傷を治す。

罪なのは精神の病であり、〈マタイによる福音書〉9章12節には「健康な人には医者是要らないが、病気の人には要る」とある。次の13節を引いて「私が来たのは義人を招くためではなく、罪人を後悔させるためである」とレイは説明する。この病を治すためには謙虚で心からの後悔が唯一の薬である。罪を償うためではなく、その償いの利点を分かち合うよう、われわれに資格を与えるためである。それは救い主キリストが自らを犠牲にしての償いであり、失ってしまった神の恵みを回復するためである (p. 233)。

我々は身体に衣服をまとい、飾るが、精神もまた神聖で道徳にかなった習慣を着せられ、善行で飾られるべきである。〈ペテロの第一の手紙〉5章5節に「みな謙遜を身に着けなさい」とあり、〈ヨハネの黙示録〉19章8節には「汚れのない麻布の衣は聖徒たちの正しい行いである」とある。また〈コロサイ人への手紙〉3章10節には「古き人をその行いと一緒脱ぎ捨て、造物主の形に従って新しくされ、真の知識に至る新しき人に着せたのである」とある (p. 234)。

悪習と罪深い行為とは汚れた衣服にたとえられる。〈ゼガリヤ書〉3章3、4節には「大祭司ヨシュアは汚れた衣を着て神の使いの前に立った。…彼の汚れた衣を脱がせなさい。私はあなたの罪を取り除いた。あなたに着せる祭服を取替えよう」とある。

我々は身を固め防御する。精神は身体と同様に^{よろい}鎧を大いに必要とする。キリスト教徒の一生は不断の闘争だからであり、それは邁進^{まいしん}しなければならぬ強力で、油断のない敵があるからである。すなわち悪魔、この世、そして我々が自ら運ぶこの汚れた肉体である。(p. 234)。

われわれはキリスト教徒としての完全武装をする必要がある。〈エペソ人への手紙〉6章13-16節に「神の武具を身につけなさい。悪しき日に、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて立つことが出来るように。腰を真理の帯で締め、正義の胸当てを胸に着け、平和の福音の備えを足に履く。何よりも信仰の盾を手に取りなさい。それを以て悪しき者の火の矢をすべて消すことが出来よう」とある (p. 235)。

キリスト教徒の鎧を身に着けて、精神の誘惑と攻撃に断固として立ち向い反撃する人。衣服を清らかに保ち、神と人に向っての攻撃は欠いている良心が、ここでは完全な平和を楽しみ、永遠にそれを保証する人。タキトゥスは北方の民であるフィン人についてこう言う。彼らは人間に対して安全であり、農業の女神ケレスに対しても安全である。彼らは神あるいは人が彼らに対してなし得ることを恐れる必要がないのは、この世に生きることと調和するような悪い条件に彼らがいるからである。彼らは今いるよりも悪い土地に追いやられることはあり得なかったし、すでにいる所よりも悪い環境に置かれることもあり得なかった。良心を持ち続ける人について言えるのは、そういう人は神と人に対して安全であるということである。それはフィン人が安全であったという意味ではなく、神と人のどちらからも降りかかるどんな悪からも安全であるということである (p. 235)。神は人に対して害をなすことはあり得ないのは力の欠如ではなく、意志の欠如からであり、それは真理と正義によって調整される。良心を持ち続ける人は人々に関しても護るが、それは全能の神に保護されているからである。そういう人に害をなす

ような人があるならば、そういう人たちは神の意志によって抑えられるか、もしも彼らがそういう人を傷つけることを許されるならば、信仰と忍耐とを働かせ、改良することのみ専心し、あの偉大なる日における未来の報奨を高めることになる。その日とは全能の神が、英雄的行為、あるいは自らのために無価値のものに耐えてきた苦病によって、自らの勇気と信仰とを際立たせてきた支持者たちに天上の宝冠を与える日である。

公正な分割は神と人々から人間を護るだけではなく、人間自身からも護る。「邪悪な人には平和は訪れないし、心の安らぎもない」と神は言われる。そのような人は自分自身と相争っている。神の戒律は人間の本性に合うものであり、正しい理性の命じるところに完全に一致するものである。人間は神の律法で判断を下し、何か律法を破ると非難される。罪を犯した人は誰も自分自身の裁きの場で、自分自身が裁き人であることで赦免されることはない (p. 235f.)。

神の存在を少しでも疑うこと、それほど悲しむべき結果をもたらす神の存在の否定は、無神論者のような考えを必ず動揺させなければならないし、人の心を不安で満たし、快樂と喜びのすべてを減らし、この世にあってさえ人を惨めにする (p. 238)。

レイはチェスターの主教の自然神学の説教から次のように引用する。「しかし他方、神を信じ、神を自分のものにする人は、もしもそのような人は皆無だとしても、何らの悪い結果をもたらす危険はない。(中略) この短い人生には、それにも拘らず、現在に関しては多大な平穩、安樂、無事がある」。これにレイはこう付け加える。「人は何も不利を招かないばかりか、この誤りから少なからぬ得をする (p. 239)。一生の間に人は未来の祝福された状態の快い夢を楽しむが、それは自らを慰め、自分の時を気分よく楽しいものにするを思い、期待してのことである。人はその夢からはけって覚める危険はなく、自らの誤りと愚行とは確信しているので、死が人の生を全く終らせる。

6. 結 び

レイは『神の英知』を著わすに当ってはヘンリー・モアの『無神論対抗策』に多くを負っている。モアの主張のほとんどは自然界のあらゆるものが巧みに考案され、自然は人間にとって有用であることを扱っており、レイはその考えを踏まえている。

天地創造の特別な二つの問題点、すなわち地球全体と人間の体のことは非常に詳しく考察している。地球の説明で最も興味深いのは従来古い考えに対してコペルニクスとガリレオの「新しい仮説」(宇宙観)を熱心に擁護していることである。天体の運動の均等性、不変性、周期と回転運動の確実性、それぞれの秩序と状態の一致は神の英知と悟りによって定められ、支配されているものだとし、その大いなる英知は人間が容易に推測したり理解したりすることが出来ないものである、と述べている。

動物の創造に関しては人間にとっての有用性を扱っている。万物の形成においては神の存在を優先して、動物の有用性に創造の目的を限定はしていない。もしも他の理由で神の存在を信じるなら、万物は有用であるように造られているという信念に推移するのは理にかなっている。

目に関しては解剖学的、生理学的説明の後で、悪事を働くことを抑制されている器官として詳述する。おごり高ぶる目、好色な目、妬み深い目は何れも否定されている。目は良い本を読むために使い、神についての知識を増やして天地創造の御業を念入りに考察し、熟考しようと促す。

話す道具としての舌については多弁、嘘、中傷、猥褻で不純な言葉、呪いとものしり、毒舌などを言葉の悪意ある乱用として、聖書からの引用を多用しつつ厳しく戒める。

レイ自身の正直で神への畏敬の念に満ちた心は、事実に向き合うことを恐れず、明らかな証拠が示されるまで、早まって独断的に言うことはなく、従来の確立された考えを拒否することも軽々には行わなかった。

レイの関心と活力の範囲は印象的と言えるほど広い。1691年の『神の英知』の初版は実験的なものであり、新版を望む声がレイの主題を発展させて豊かなものにする機会を与えた。その結果、『神の英知』は当時の科学の全分野を扱い、多くの重要な点を含む基礎事実の宝庫となった。とりわけ彼自身の観察はその特質において驚くほど近代的である。自然界における諸問題に注目しており、レイの才能の非凡なことが認められる。

〈注〉

-
- 1) 八杉龍一『生物学の歴史』上 (NHK 出版, 1984), p. 63.
 - 2) *The Wisdom of God* からの引用は、ページ数とも Samuel Smith, London (1691) 刊の復刻版 (Georg Olms Verlag 刊) による。ただし、この復刻版のページづけは p. 193から最終 p. 239まで、誤って実際よりも10ページずつ多いものになっているので、正してある。
 - 3) Raven, Charles E., *John Ray: naturalist* (Cambridge, 1950), p. 459.

〈参考文献〉

-
- Gribbin, Mary and Gribbin, John, *Flower Hunters* (Oxford U. P., 2008).
- Paley, William, *Natural Theology or Evidence of the Existence and Attributes of the Deity, collected from the appearances of nature* (Oxford World's Classics, 2006).
- John Ray and William Derham, *Select Remains of The Learned John Ray: With His Life* (Ja. Dodsley, 1760); Reprinted by Kessinger Publishing.
- Raven, Charles E., *John Ray: naturalist* (Cambridge U.P., 1980).
- Sambrook, James, *The Eighteenth Century: The intellectual and cultural context of English literature, 1700-1789* (Longman, 1986).

Abstract

John Ray (1627–1705), known as the father of natural history in Britain, was responsible for remarkable achievements in botany and zoology. After the Scientific Revolution of the 17th century, harmonizing reason with faith was a major concern for philosophers and theologians in the early 18th century. Natural theology, which was considered a solution to this problem, was well-received by both the Church of England and the thinkers of the time, and it reached the height of its glory starting in the 17th century and continuing until the mid-19th century.

Ray's *The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation* (1691), based on a lecture given at Cambridge, was read by a great many people as an authoritative book on science and theology during the 18th century, and had a profound influence on the world.

This paper will begin with a brief survey of Ray's background and academic activities at Cambridge. Second, I will examine Ray's theological attitude toward writings about the Wisdom of God, and the contents of *The Wisdom of God* will be examined in detail. Finally, I will consider the following : his view of nature, his thoughts on divine wisdom and providence, and his opinion on the moral principles of Christians.

Key words : Ray, John

natural history

natural theology

God